

(19) 日本国特許庁(JP)

(12) 特許公報(B2)

(11) 特許番号

特許第5258855号
(P5258855)

(45) 発行日 平成25年8月7日(2013.8.7)

(24) 登録日 平成25年5月2日(2013.5.2)

(51) Int. Cl.		F I			
A 6 1 H	5/00	(2006.01)	A 6 1 H	5/00	Z
A 6 1 B	3/10	(2006.01)	A 6 1 B	3/10	N

請求項の数 6 (全 10 頁)

(21) 出願番号	特願2010-190412 (P2010-190412)	(73) 特許権者	510232360 中国科学院光电技術研究所
(22) 出願日	平成22年8月27日 (2010.8.27)		中華人民共和国四川省成都市双流350信箱
(65) 公開番号	特開2011-125680 (P2011-125680A)	(73) 特許権者	505383316 中国科学技▲術▼大学
(43) 公開日	平成23年6月30日 (2011.6.30)		中華人民共和国安徽省合肥市金寨路96号
審査請求日	平成22年8月27日 (2010.8.27)	(74) 代理人	110001508 特許業務法人 津国
審判番号	不服2012-26084 (P2012-26084/J1)	(74) 代理人	100078662 弁理士 津国 肇
審判請求日	平成24年12月28日 (2012.12.28)	(74) 代理人	100131808 弁理士 柳橋 泰雄
(31) 優先権主張番号	200910262471.9	(74) 代理人	100119079 弁理士 伊藤 佐保子
(32) 優先日	平成21年12月18日 (2009.12.18)		
(33) 優先権主張国	中国 (CN)		

最終頁に続く

(54) 【発明の名称】 双眼波面補償光学の視知覚の学習訓練器具

(57) 【特許請求の範囲】

【請求項1】

それぞれ近赤外基準光源、ウェーブフロント矯正器及びウェーブフロントセンサーを含み、被検者の左眼と右眼の波面収差をそれぞれ測定して得るための左眼と右眼波面収差の測定サブシステムと、

それぞれ制御装置及び前記ウェーブフロント矯正器を含み、測定して得られた被検者の左眼と右眼の波面収差のそれぞれに基づいて前記ウェーブフロント矯正器を駆動制御して、被検者の左眼と右眼の波面収差をそれぞれ矯正するための左眼と右眼波面収差の矯正サブシステムと、

ビデオ処理回路、視標表示装置及び前記ウェーブフロント矯正器を含み、前記ビデオ処理回路により異なる空間周波数、異なるコントラストを有する視標を処理し、前記視標表示装置に表示させ、駆動制御された前記ウェーブフロント矯正器を介して被検者に表示して、双眼のコントラスト閾値の測定、双眼の立体視力の測定及び視知覚の学習訓練を行うための双眼視知覚の学習訓練サブシステムとを備える、 双眼波面補償光学の視知覚の学習訓練器具。

【請求項2】

前記ウェーブフロント矯正器は、可変形反射鏡、液晶ウェーブフロント矯正器、マイクロ加工薄膜可変形鏡、MEMS可変形鏡、バイモルフ可変形鏡、液体可変形鏡からいずれか一つ選ばれたものであることを特徴とする請求項1に記載の 双眼波面補償光学の視知覚の学習訓練器具。

10

20

【請求項 3】

前記ウェーブフロントセンサーは、マイクロレンズアレイに基づくハルトマンウェーブフロントセンサー、マイクロプリズムアレイに基づくハルトマンウェーブフロントセンサー、曲率ウェーブフロントセンサー、ピラミッドウェーブフロントセンサーからいずれか一つ選ばれたものであることを特徴とする請求項1に記載の双眼波面補償光学の視知覚の学習訓練器具。

【請求項 4】

前記視標表示装置は、CRTディスプレイ、商用オーバーヘッドプロジェクタ、液晶ディスプレイ、プラズマディスプレイ、ELディスプレイからいずれか一つ選ばれたものであることを特徴とする請求項 1 に記載の双眼波面補償光学の視知覚の学習訓練器具。

10

【請求項 5】

前記ビデオ処理回路は、一般ビデオ出力中の R チャンネルと B チャンネルとを組合せて、14 ビット以上のグレイ・スケールを実現するものであることを特徴とする請求項1に記載の双眼波面補償光学の視知覚の学習訓練器具。

【請求項 6】

前記左眼と右眼波面収差の矯正サブシステムは、同一の制御装置を共用することを特徴とする請求項1に記載の双眼波面補償光学の視知覚の学習訓練器具。

【発明の詳細な説明】

【技術分野】

【0001】

本発明は、双眼収差の矯正、視機能測定（コントラスト閾値の測定及び双眼の立体視力の測定を含むがそれらに限らない）、視知覚学習訓練（双眼のコントラスト感度の協同訓練及び双眼の立体視覚の訓練を含むがそれらに限らない）などの多機能を備え、波面補償光学系により双眼収差を矯正し、精細な視覚刺激を受けることができ、この状況では、極限状態での人眼の識別能力を測定できるとともに、双眼に対して視知覚訓練を施すことにより、視知覚の学習訓練効果及び双眼の視機能を有効的に向上させることができる、双眼波面補償光学の視知覚の学習訓練方法及び学習訓練器具に関する。

20

【背景技術】

【0002】

人類の視力発育は次第に成熟する過程である。眼球の発育は、人が生まれた時に概ね完成する。しかし、解剖学から見ても、生理機能から見ても、発育が完全になったとは言えない。発育は生まれてから相当の時間をかけて続いている。視力が正常に発育するためには、2つの要件を満たさなければならず、1つは生まれた後の自然な成長、発育過程であり、もう1つは外界からの視覚刺激である。視力発育に最も重要な期間中（0～7歳）において、目を覆うことが長く続けば、外界から物の映像による正常な視覚刺激を受けられないため、視力が正常に発育することができなくなり、低視力の状態にとどまる。

30

【0003】

眼球の機能は視力に影響を与える重要な要素である。眼球の光学特性は完璧ではなく、その性能は瞳孔の回折、角膜及び水晶体の収差、房水の散乱などの多種の要因により影響されている（R.Williams, D., & Hofer, H. Formation and Acquisition of the Retinal Image. In: J.S.W.Leo M.Chalupa (Ed.) The Visual Neurosciences, the MIT Press, Cambridge, Massachusetts, London, England, 2003）。

40

【0004】

一般的に言えば、房水の散乱は無視してもよい。瞳孔が大きい場合は、収差が大きい、回折が小さい。一方、瞳孔が小さい場合は、収差が小さい、回折が大きい。人眼の収差は低次収差及び高次収差に分かれており、低次収差は矯正しやすく、高次収差の矯正は比較的困難である。

【0005】

最近、波面補償光学（Adaptive Optics）の技術を視覚科学の研究に応用し、高次収差と人の正常な視力との関係、及び空間視力の極限を探求している研究者が沢山いる（Geun

50

-Young Yoon and David R. Williams, Visual Performance after correcting the monochromatic and chromatic aberrations of the eye, J. Opt. Soc. Am. A/Vol.19, No.2)。しかし、視覚システムのすべての収差（低次収差と高次収差）が矯正された後、超視力が実現できるか否かについて、まだ一致した結論が得られていない (Marcos, S., Sawides, L., Gamba, E., & Dorronsoro, C., Influence of adaptive-optics ocular aberration correction on visual acuity at different Luminances and contrast polarities. 8:1-12, 2008)。

【0006】

視覚システムの機能が正常に発育するためには視覚経験の関与が必要である (Chiu, C., & Weliky, M., The Role of Neural Activity in the Development of Orientation Selectivity. In: J.S.W. Leo M. Chalupa (Ed.) The Visual Neurosciences, The MIT Press, Cambridge, Massachusetts, London, England, 2003)。精細な視力の発育のために、視覚神経系の精細な発育が必要であり、当該発育は眼球の光学系により網膜に形成された映像の鮮明さによって決められる。人眼の高次収差と回折との共同作用で、網膜に十分に鮮明な映像が形成できず、この映像の鮮明さに制限されているため、視覚神経系の識別できるカットオフ空間周波数は、眼球が網膜に形成できる映像の最高空間周波数を超えない。

【0007】

視覚学習は、学習の後に、特定の映像に対する成人神経システムの識別能力が大いに向上すること、即ち成人神経システムの可塑性を反映している。既に行われた沢山の心理学テストによれば、成人は学習を通して、多種の視覚の任務を達成する成功率及び速度が大いに向上できることが明らかになった (Zhou YF, Huang CB, Xu PJ, Tao LM, Qiu ZP, Li XR and Lu ZL, Perceptual Learning Improves Contrast Sensitivity and Visual Acuity in Adults with Anisometric Amblyopia. Vision Research, 46(5):739-750, 2006)。しかし、従来の視覚学習は、通常、レンズを用いて人眼の低次収差を矯正するものであり、人眼の高次収差と回折の共同作用で、網膜に十分に鮮明な映像が形成できず、この映像の鮮明さにリミットがあるため、単純な視覚学習による人眼の視機能の改善幅は制限されている。

【0008】

視覚神経系の可塑性に鑑み、本発明では、波面補償光学の収差矯正技術と視覚の学習訓練とを組合せ、波面補償光学技術により双眼の収差を矯正した後、網膜上に形成される映像の質を大きく向上させることができ、このような精細な視覚の刺激で、双眼に対して同時に視覚の学習訓練を行い、視覚神経系の識別能力を向上させることで、視覚の学習訓練の効果及び双眼の視機能を有効的に上げることが提案している。

【発明の概要】

【0009】

本発明で解決しようとする課題は、双眼の収差の矯正、視機能測定（コントラスト閾値の測定及び双眼の立体視力の測定を含むがそれらに限らない）、視覚の学習訓練（双眼のコントラスト感度の協同訓練及び双眼の立体視覚の訓練を含むがそれらに限らない）などの多機能を備え、波面補償光学系により双眼の収差を矯正し、精細な視覚刺激を受けることができ、この状況では、極限状態での人眼の識別能力を測定できるとともに、双眼に対して視覚の学習訓練を施すことにより、視覚の学習訓練効果及び双眼の視機能を有効的に向上させることができる、双眼波面補償光学の視覚の学習訓練方法及び学習訓練器具を提供することである。

【0010】

本発明の第1の実施態様によれば、それぞれ近赤外基準光源、ウェーブフロント矯正器及びウェーブフロントセンサーで測定し、被検者の左眼と右眼の波面収差を得るための双眼波面収差の測定ステップと、測定で得られた被検者の左眼と右眼の波面収差のそれぞれに基づいてウェーブフロント矯正器を駆動制御して、被検者の左眼と右眼の波面収差をそれぞれ矯正するための双眼収差の矯正ステップと、異なる空間周波数、異なるコントラストを有する視標をビデオ処理回路により処理した後に、視標表示装置に表示させ、駆動制

10

20

30

40

50

御されたウェーブフロント矯正器を介して被検者に表示し、双眼の視機能の測定及び視知覚の学習訓練を行うための双眼視知覚の学習訓練ステップとを備える、双眼波面補償光学の視知覚の学習訓練方法が提供されている。

【 0 0 1 1 】

双眼の視機能の測定が単眼 / 双眼のコントラスト閾値の測定であることは好ましい。心理物理学の方法における調節法を用いて、被検者の回答に基づいて、リアルタイムで刺激の難易度を調節する。すなわち、被検者の回答が連続して正解する回数が第 1 の所定回数となると、次に表示される視標のコントラストを下げる。一方、被検者の回答が連続して誤る回数が第 2 の所定回数となると、次に表示される視標のコントラストを上げる。上述の調節法により、テスト全体における被検者の正確度を一定のレベルにすることにより、
10 被検者の単眼 / 双眼のコントラスト閾値を得ることができ、そして、被検者の単眼 / 双眼のコントラスト閾値を逆数にすれば、単眼 / 双眼のコントラスト感度を得る。

【 0 0 1 2 】

さらに好ましくは、前記双眼視知覚の学習訓練ステップにおいて、異なる空間周波数を有する光格子について、被検者の左眼のコントラスト閾値及び右眼のコントラスト閾値をそれぞれ測定する。異なる空間周波数における被検者の左眼のコントラスト閾値及び右眼のコントラスト閾値の変化によって、所定の人眼コントラスト閾値の対応する空間周波数を選択する。選択された空間周波数の光格子を利用して、視知覚の学習訓練を行う。

【 0 0 1 3 】

或いは、前記双眼視知覚の学習訓練ステップにおいて、前回の学習訓練後に測定して得られた空間周波数を選択する。選択された空間周波数の光格子を利用して、視知覚の学習訓練を行う。
20

【 0 0 1 4 】

好ましくは、双眼の視機能の測定は双眼の立体視力の測定であり、心理物理学方法における固定刺激法を採用し、異なる双眼の視差における被検者の正確度を測定することにより、被検者の心理物理曲線を得る。

【 0 0 1 5 】

さらに好ましくは、前記双眼視知覚の学習訓練ステップにおいて、測定された心理物理曲線に基づいて、双眼の視差を選択し、選択された双眼の視差を利用して、所定周期の双眼の視知覚の学習訓練を行う。
30

【 0 0 1 6 】

第 2 の実施態様によれば、それぞれ近赤外基準光源、ウェーブフロント矯正器及びウェーブフロントセンサーを含み、被検者の左眼と右眼の波面収差をそれぞれ測定して得るための左眼と右眼波面収差の測定サブシステムと、それぞれ制御装置及び前記ウェーブフロント矯正器を含み、測定して得られた被検者の左眼と右眼の波面収差のそれぞれに基づいて前記ウェーブフロント矯正器を駆動制御して、被検者の左眼と右眼の波面収差をそれぞれ矯正するための左眼と右眼波面収差の矯正サブシステムと、ビデオ処理回路、視標表示装置及び前記ウェーブフロント矯正器を含み、前記ビデオ処理回路により異なる空間周波数、異なるコントラストを有する視標を処理し、前記視標表示装置に表示させ、駆動制御された前記ウェーブフロント矯正器を介して被検者に表示して、双眼の視機能の測定及び
40 視知覚の学習訓練を行うための双眼視知覚の学習訓練サブシステムとを備える、双眼波面補償光学の視知覚の学習訓練器具が提供されている。

【 0 0 1 7 】

前記ウェーブフロント矯正器は、可変形反射鏡、液晶ウェーブフロント矯正器、マイクロ加工薄膜可変形鏡、MEMS 可変形鏡、バイモルフ可変形鏡、液体可変形鏡から選ばれたものであることは好ましい。

【 0 0 1 8 】

前記ウェーブフロントセンサーは、マイクロレンズアレイに基づくハルトマンウェーブフロントセンサー、マイクロプリズムアレイに基づくハルトマンウェーブフロントセンサー、曲率ウェーブフロントセンサー、ピラミッドウェーブフロントセンサーから選ばれた
50

ものであることは好ましい。

【0019】

前記視標表示装置は、CRTディスプレイ、商用オーバーヘッドプロジェクタ、液晶ディスプレイ、プラズマディスプレイ、ELディスプレイから選ばれたものであることは好ましい。

【0020】

前記ビデオ処理回路は、一般ビデオ出力中のRチャンネルとBチャンネルとを組合せて、14ビット以上のグレイ・スケールを実現するものであることは好ましい。

【0021】

前記左眼と右眼収差の矯正サブシステムは、同一の制御装置を共用することは好ましい。 10

【0022】

従来技術に比べて、波面補償光学の技術を双眼の視知覚の学習訓練に応用したのは本発明が初めてである。当該システムは、双眼の収差の矯正、視機能測定（コントラスト閾値の測定及び双眼の立体視力の測定を含むがそれらに限らない）、視知覚の学習訓練（双眼のコントラスト感度の協同訓練及び双眼の立体視覚の訓練を含むがそれらに限らない）などの多機能を備える。従来の視知覚の学習訓練と比較して、当該システムによれば、波面補償光学系により双眼の収差を矯正し、精細な視覚刺激を受け、この状況では、極限状態での人眼の識別能力を測定できるとともに、双眼に対して視知覚の訓練を施すことにより、視知覚の学習訓練効果及び双眼の視機能を有効的に向上させることができる。 20

【図面の簡単な説明】

【0023】

本発明の上述の又はその他の目的、特徴及び長所をより明確にするために、以下の図面を用いて本発明の好ましい実施例について説明する。

【図1】図1は本発明の組成構造の原理を説明するブロック図である。

【図2】図2は本発明の視知覚の学習システムにおける双眼のコントラスト感度の協同訓練を示す図である。

【0024】

図において、左眼と右眼とを区別するために、それぞれ「L」及び「R」で左眼と右眼に用いられる各部品を表す。 30

【発明を実施するための最良の形態】

【0025】

本発明を実現する過程を明瞭かつ詳細に説明するために、次に本発明に係る具体的な実施例を例示する。図面を参照しながら本発明の好ましい実施例を詳しく説明するが、本発明の理解にずれが生じることがないように、本発明にとって不必要な詳細及び機能を省略する。

【0026】

図1は本発明の組成構造の原理を説明するブロック図である。

【0027】

図1に示すように、本発明に係る双眼波面補償光学の視知覚の学習訓練器具は、2セットの近赤外基準光源1L及び1R、2セットのコリメーティングレンズ2L及び2R、2セットの第1の反射鏡3L、3R、2セットの第1のビームスプリッター4L、4R、2セットの第2の反射鏡5L及び5R、2セットのビームマッチングアフォーカルシステム7L及び7R、2セットのウェーブフロント矯正器8L及び8R、2セットの第3の反射鏡9L及び9R、2セットのビームマッチングアフォーカルシステム10L及び10R、2セットの第2のビームスプリッター11L及び11R、2セットのウェーブフロントセンサー12L及び12R、コンピュータ13L及び13R、2セットの高電圧アンプ14L及び14R、2セットの第4の反射鏡15L及び15R、直角プリズム16、映像形成光学系17、視標表示装置18、ビデオ処理回路19及びコンピュータ20からなる。被検者の左眼と右眼はそれぞれ図中符号6L及び6Rで表されている。また、図1において 40 50

、コンピュータ 13 L、13 R 及び 20 が異なるコンピュータを表しているが、コンピュータ 13 L、13 R 及び 20 が同一コンピュータであってもよく、物理的に分離した複数のコンピュータであってもよいということは、当業者にとって自明なことであることは言うまでもない。

【0028】

本発明に係る双眼波面補償光学の視知覚の学習訓練方法は、双眼波面収差の測定段階、双眼波面収差の矯正段階、及び視知覚の学習訓練段階という3つの段階を含む。

【0029】

双眼波面収差の測定段階において、近赤外基準光源 1 L 及び 1 R から発される光は、それぞれコリメーティングレンズ 2 L 及び 2 R により視準され、第 1 の反射鏡 3 L 及び 3 R、第 1 のビームスプリッター 4 L 及び 4 R と第 2 の反射鏡 5 L 及び 5 R を介して、人眼 6 L 及び 6 R の瞳孔に反射され、人眼 6 L 及び 6 R の眼底から反射される光は、それぞれ第 2 の反射鏡 5 L 及び 5 R、第 1 のビームスプリッター 4 L 及び 4 R を介してビームマッチングアフォーカルシステム 7 L 及び 7 R を透過し、更にウェーブフロント矯正器 8 L 及び 8 R、第 3 の反射鏡 9 L 及び 9 R により反射され、ビームマッチングアフォーカルシステム 10 L 及び 10 R を通して、第 2 のビームスプリッター 11 L 及び 11 R の反射により、ウェーブフロントセンサー 12 L 及び 12 R に入り、ウェーブフロントセンサー 12 L 及び 12 R は、測定された誤差信号をそれぞれコンピュータ 13 L 及び 13 R に送り、処理により左眼と右眼の波面収差は得られる。

【0030】

そして、双眼波面収差の矯正段階において、コンピュータ 13 L 及び 13 R は測定された左眼と右眼の波面収差に基づいて、コンピュータの制御ソフトウェアの処理により、ウェーブフロント矯正器 8 L 及び 8 R の制御電圧を得て、前記制御電圧をそれぞれ高電圧アンプ 14 L 及び 14 R にて増幅した後、ウェーブフロント矯正器 8 L 及び 8 R を駆動し、相応の変化を発生させて、左眼と右眼の波面収差をそれぞれ矯正する。

【0031】

双眼波面収差の矯正段階の終了後、視知覚の学習訓練段階に入る。コンピュータ 20 にインストールされた視機能測定と視覚訓練ソフトウェアは、異なる空間周波数、異なるコントラストを有する視標を生成し、ビデオ処理回路 19 の処理により、視標表示装置 18 に表示される。被検者は、第 2 の反射鏡 5 L 及び 5 R、第 1 のビームスプリッター 4 L 及び 4 R を介してビームマッチングアフォーカルシステム 7 L 及び 7 R、ウェーブフロント矯正器 8 L 及び 8 R、第 3 の反射鏡 9 L 及び 9 R、ビームマッチングアフォーカルシステム 10 L 及び 10 R を透過し、第 2 のビームスプリッター 11 L 及び 11 R を透過し、第 4 の反射鏡 15 L 及び 15 R、直角プリズム 16、映像形成レンズ 17 を介して、視標表示装置 18 に表示されている視標を観察し、双眼の視知覚の学習訓練及び人眼の視機能の測定を行う（コントラスト閾値の測定及び双眼の立体視力の測定を含むがそれらに限らない）。

【0032】

ウェーブフロント矯正器 8 L 及び 8 R は、可変形反射鏡 (Deformable reflective mirror)、液晶ウェーブフロント矯正器 (Liquid crystal wavefront corrector)、マイクロ加工薄膜可変形鏡 (Micromachined membrane deformable mirror)、MEMS 可変形鏡 (Microelectromechanical (MEMS) deformable mirror)、バイモルフ可変形鏡 (Bimorph deformable mirror)、液体可変形鏡 (Liquid deformable mirror) から選ぶことができる。

【0033】

ウェーブフロントセンサー 12 L 及び 12 R は、マイクロレンズアレイに基づくハルトマンウェーブフロントセンサー (Hartmann wavefront sensor)、マイクロプリズムアレイに基づくハルトマンウェーブフロントセンサー (中国特許 ZL03126431.X を参照)、曲率ウェーブフロントセンサー (Curvature wavefront sensor)、ピラミッドウェーブフロントセンサー (Pyramid wavefront sensor) から選ぶことができる。

【 0 0 3 4 】

視標表示装置 1 8 は C R T ディスプレイ、商用オーバーヘッドプロジェクタ、カラー液晶ディスプレイ、プラズマディスプレイ、E L ディスプレイ、有機 E L ディスプレイから選ぶことができる。

【 0 0 3 5 】

ビデオ処理回路 1 9 は、人眼の視機能の測定及び視知覚の学習訓練の必要を満たすように、一般ビデオ出力中の R チャンネルと B チャンネルとを組合せて、1 4 ビット (1 6 3 8 4 階調) 以上のグレイ・スケールを実現することができる。たとえば、ビデオ処理回路 1 9 は、中国実用新案 Z L 0 2 2 2 0 9 6 8 . 9 に開示された具体的な回路を採用することができる。

10

【 0 0 3 6 】

図 2 は本発明の視知覚の学習システムにおける双眼のコントラスト感度の協同訓練を示す図である。

【 0 0 3 7 】

図 2 に示されているように、毎回の訓練において、スクリーンに十字線が順次に二回現れるとともに、注意音が伴なう。各十字線の直後に現れるのは空白図形 (画面無し) である可能性もあれば、測定待ちのターゲット (周縁がぼやけた状態となるように処理された正弦光格子) である可能性もある。光格子が一つ目の十字線の後に現れると、被検者に方向キーの左キーを押して報告してもらう。そして、光格子が二つ目の十字線の後に現れると、被検者に方向キーの右キーを押して報告してもらう。キーが押されると、次の訓練タスクは起動される。すべての訓練タスクが終了し、即ち一日の視知覚の学習訓練タスクが完了するまで、上述のプロセスを繰り返す。

20

【 0 0 3 8 】

たとえば、本発明では、双眼の視機能の測定は双眼のコントラスト閾値の測定であってもよく、心理物理学の方法における調節法を用いて、被検者の回答に基づいて、リアルタイムで刺激の難易度を調節することができる。すなわち、被検者の回答が連続して正解すると、次に表示される視標のコントラストは低くされ、難度はある程度上げられることになる。一方、被検者が回答を間違えると、次に表示される視標のコントラストは高くされ、難度はある程度下げられることになる。このような調節メカニズムによれば、テスト全体における被検者の正確度が一定に保たれる。テストが続くにつれて、コントラストは最後に被検者の人眼のコントラスト閾値に収斂され、そしてそれを逆数にすれば、コントラスト感度を得ることができる。

30

【 0 0 3 9 】

双眼のコントラスト感度の協同訓練において、訓練の前、後に、それぞれ被検者の単眼と双眼のコントラスト感度の曲線を測定し、全部で 8 種の空間周波数 (0 . 6 、 1 、 2 、 4 、 8 、 1 6 、 2 4 、 3 6 サイクル / mm) をテストし、異なる空間周波数の光格子はランダムに現れる。テストの終了後、8 種の空間周波数はすべて被検者の人眼コントラスト閾値に収斂される。異なる空間周波数における被検者の人眼のコントラスト閾値の変化に応じて、適切な空間周波数を選定して訓練を行う (即ち非優位眼のカットオフ周波数、例えば、測定された非優位眼のコントラスト感度の曲線に基づいて、ある被検者の非優位眼のコントラスト閾値が 0 . 4 である時に対応する空間周波数を推測することができる) 。訓練の過程において、光格子の周波数は常に不変に保たれ、左、右眼の刺激図形は完全に同じである。

40

【 0 0 4 0 】

さらに、本発明では、双眼の視機能の測定は双眼の立体視力の測定であってもよく、心理物理学の方法における固定刺激法も採用し、異なる双眼視差における被検者の正確度を測定することにより、その心理物理の曲線を得ることができる。

【 0 0 4 1 】

双眼の立体視覚の訓練において、訓練の前、後に、固定刺激法を用いて、異なる双眼視差における被検者の正確度を測定し、その立体視覚の心理物理曲線を得る。訓練前に測定

50

された心理物理曲線に基づいて、適切な視差を選定し、この視差で10日ほど訓練を行う。

【0042】

視知覚の学習としては、従来の「テスト 訓練 再テスト」方法が採用できる。被検者が毎日同一の時間帯で選定された空間周波数（又は視差）で所定量の訓練タスクをやり遂げる。

【0043】

双眼のコントラスト感度の協同訓練は、コントラスト閾値の測定と類似する調節法で行うことができる。また、訓練において、一日目の訓練後の被検者の最終的なコントラスト閾値が次の日の初期値にされる。

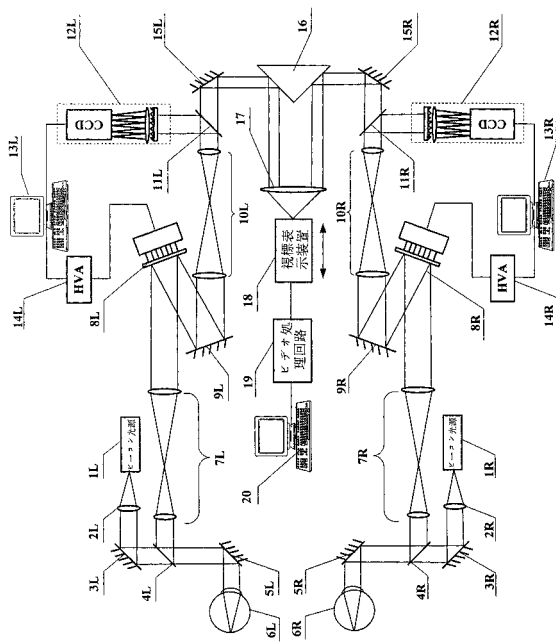
【0044】

双眼の立体視覚訓練は、双眼立体視力の測定と類似する固定刺激法を行うことができる。また、訓練において、刺激の視差は固定不変である。

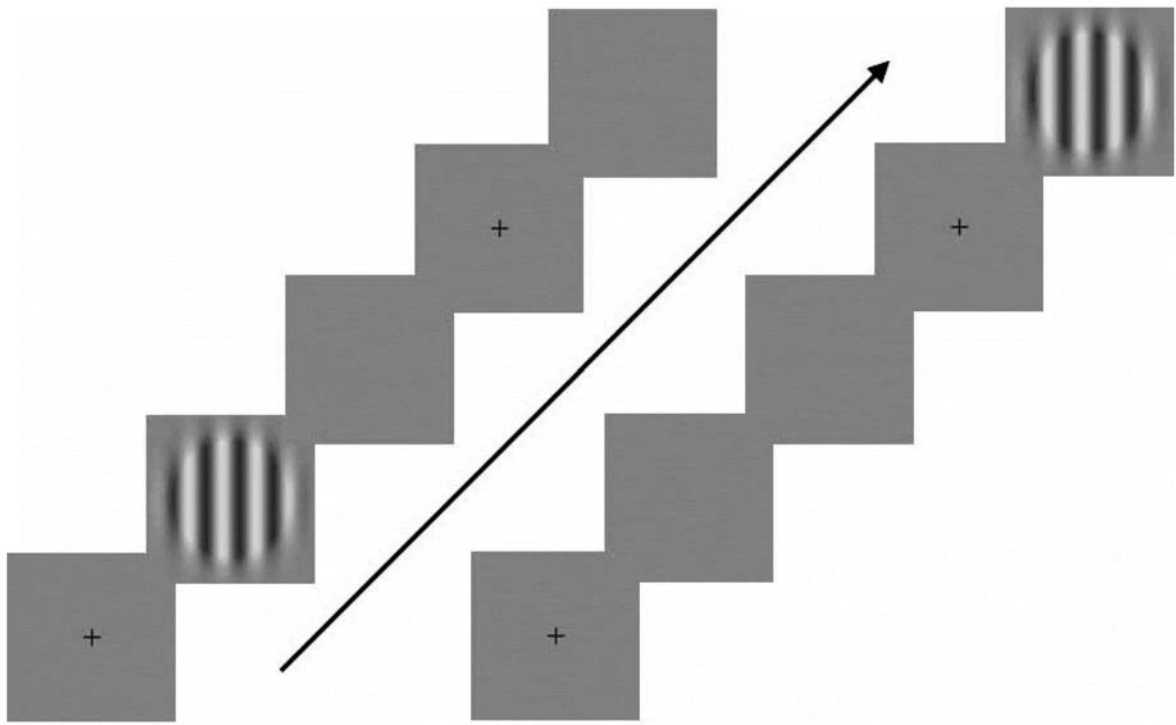
【0045】

以上のように、好ましい実施例を用いて本発明について説明した。本発明の技術思想及び範囲から逸脱しない限り、当業者はその実施の態様に対して任意に変更、置き換え及び追加を行うことができることは、いうまでもない。したがって、本発明の範囲は上述の実施態様に限られるものではなく、特許請求の範囲により特定されると理解されるべきである。

【図1】



【図2】



フロントページの続き

- (74)代理人 100135873
弁理士 小澤 圭子
- (74)代理人 100116528
弁理士 三宅 俊男
- (74)代理人 100122736
弁理士 小國 泰弘
- (74)代理人 100122747
弁理士 田中 洋子
- (74)代理人 100132540
弁理士 生川 芳徳
- (74)代理人 100146031
弁理士 柴田 明夫
- (72)発明者 張雨東
中華人民共和国四川省成都市双流350信箱
- (72)発明者 周逸峰
中華人民共和国安徽省合肥市金寨路96号
- (72)発明者 戴雲
中華人民共和国四川省成都市双流350信箱
- (72)発明者 饒学軍
中華人民共和国四川省成都市双流350信箱
- (72)発明者 趙豪欣
中華人民共和国四川省成都市双流350信箱

合議体

- 審判長 村田 尚英
審判官 高田 元樹
審判官 関谷 一夫

- (56)参考文献 国際公開第2009/000902(WO, A2)
特開2006-116112(JP, A)
特表2008-503271(JP, A)
特開2007-97673(JP, A)

- (58)調査した分野(Int.Cl., DB名)
A61H 5/00